

せめてもの

卷頭の言葉



何處へ行くにも、必ずウチワ太鼓を打って歩く人がいました。不審に思って、或る時、思い切って尋ねてみました。

「あなたは、何時もお太鼓を打って歩かれますが、何か深いわけでもあるのですか？」

その人は、にっこり笑って、静かに答えました。言葉は簡単でした。

「私は、お題目ほど有難いものはない、と感謝しています。

そして出来うれば、一人でも多くの人々に、このお題目をお伝え致したい、と願っているのです。然しこれは、学問もありません。話しも下手です。そこで、せめてもの、道を歩く時は、お太鼓をうち、お題目を唱えて、本仏のお題目は、本仏のお題目のまゝに、これをお伝えしようとしているのです。若し少しでも私の祈りが、何かのお役に立つならば、せめてもの、世間さまに対する報恩になりますから！」

鷲峰 9月号 目次

第2巻・第9号・通巻15号

卷頭の言葉・せめてもの	1
出家の動機	
我が入信と改宗の記(その2) 吉松白鳥	3
ケサとスサ	22
教義説明・顔と人格	27
信仰相談室	
謗法とはどういうことか 日高白象	30
読者の声 その1 丸山勇夫	38
その2 刀禪義昭	39
賛助会員紹介	41
編集後記	45
本誌発行所の変更について	42

表紙題字・身延山法主藤井日静親下

表紙写真・インド菩提山へ贈る身延山金銅の釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社・長藤原秀憲氏寄進

我が入信と改宗の記

その2

この手記を、
今は亡き父と兄の
靈に捧ぐ

吉松白耀

8

どの家庭でも、そうでしようが、一家の中心であった父親の死には、動転するようなショックをうけるものです。

私の家も、御多聞に漏れず、父の死を契機として、想像も出来ないほど急激な変貌をとげざるを得ませんでした。

末子の私自身をさえ、学校も夜学へ変ったほどでした。そして昼間は書籍販売店につとめ、つとめのあいまをみては、父が残して行った道場の信徒にも接するという、多忙な生活が始まりました。

大半の学生が、

「夜学はつらい」

と申します。火の気もない冬の教室、破れたガラス窓から吹き込む冷い風、かじか

んだ指に握るエンピツ、その上、昼間の労働の疲れが、思わず出て来る……たしかにつらいはずです。

然しそれには、どんなことでも、人がいうほど「らしい」とは思えませんでした。そ

それには、それだけのものがあつたからでしょう。

夜学よりもつらい父の死、それとともになう一家の急変、そうした宿命にも似た諦観の中に、臨終のまぎれ、父のかばねを抱きしめながら書った。その時の決意は、へつらひと思われるようなことに遭遇するたびに、却って、より鮮明に、より強固になつて行くばかりでした。

御承知の通り、夜間高校は普通高校と違って四年制度でした。私も四年生にもなると、高校卒業後における将来の方針を決

定しなければならなくなりました。

勿論、父の遺言通り、法華經を受持宣布する宗教家になるという、決意そのものには変りはありませんでした。然し、それにしても、

〔そうなるには、具体的に、一体どういう道を進めばよいのか〕

〔このまゝ父の残した道場を守るべきか
それとも善き指導者—善知識を求めて、
再び、お寺へあがるべきか〕
〔或は宗門の大学へ進学すべきか〕
〔或は宗門の大学へ進学すべきか〕

母にも相談し、兄たちにも相談しました。

最後には、父が生前、よく出入りしていた福岡市蓮池町の、日蓮宗本岳寺にまで、相談に行きました。この時、住職立野良覚上

人
力
文

「日蓮宗総本山の身延山には、身延山大学という宗門大学がある。大成したいと思うならば、何はともあれ、そこへ進学するがよい……」

と、すすめられました。ここで始めて身延山に大学があることを知ったのですか、もともと私は、日蓮宗でなく本門法華宗の者です。父の跡目をつぐにしても、進学するのであるならば、本門法華宗の学林へ行くべきです。私は迷いました。

立野上人のすゝめは懇切でした。それだけに、なお迷いました。然し、立野上人のすゝめる言葉の中には、他宗意識というものは微塵もありませんでした。若し、そうしたものが感ぜられたならば、当時の私としては、即座に反撲したことでしょう。立野上人の温い大らかなすすめ、宗派を

越えて、ひなすらに私の前途を祈るかのような慈愛……これに感動した私は、結局、すすめられるまゝに身延山大学へ進学する決心をしました。

然し、その決意の底には、私の兄正員兄さんが、出家して間もなく、日蓮宗内における矛盾と相刺。そしてその中にあって、小心であつたとはいえ、真剣になればなるほど、みずから僧道にも行きすまり果て、遂には自殺せんとして、その死に場所を身延山に求めたということ、このため父をはじめ私たち一家が、不本意にも日蓮宗より離縛せざるを得なくなり、本門法華宗へ転宗をよぎなくされたまゝおよそ三十年、今日にまで至っていたということ、そうしたことから、むしろ私自身、日蓮宗という宗門に対しても、身延山という山に対して

も、深く潜伏している他宗意識から、身延山大学へ入る以上、何か敵地にでも潜入するような、鋭いものをいだいていたことは否定出来ませんでした。

いうなれば日蓮宗総本山身延山大学に入ることによって、身はなお本門法華宗の立場にあって、

正員兄さんを自殺するまでに追い込んで行つた日蓮宗門奥義の矛盾と相剋、そういった宗門の恥部なるものを笑きとめて、出来ればそれを、末弟の我が手で、ひんむいてやろう

といったような謀叛にも似た気持が、心の底にうごめいていたのです。たしかに、若し正員兄さんが自殺にまで追いつめられなかつたならば、父も私たち一家の者も

また父が他界するにしても、日蓮宗僧侶として他界することが出来たものを……

また私自身、生れながらに肩身の狭い思いをせずにすんだものを……

という、極深い怨み心が秘められていたのは事実でした。

然し、こうした反動的な心よりも、更に大きかったのは、日頃、故郷で聞かされていた、身延山そのものに対する憧れと期待でした。

身延の祖廟、日蓮大聖人の魂魄を留められた霊山と思えばこそ、身延山という名を聞いただけでも、身も心も引きしまるような、千古の神秘性を感じずにはおられませんでした。

昭和三十四年二月二十七日、私は本岳寺

知りました。

の立野上人につれられて、身延山に参りました。

生れて始めて踏みしめる身延の大地、見
あけるほど壮大な山門の威容、苔むした石
段、天にも攀する老杉の大木、道ばたの石
ころも、木も草も、沢の流れの水までも、
私にとっては、すべて感動を与えないもの
とてありませんでした。

私の感動は、祖廟にぬかずいた時、頂点
に達した感がしました。私は、あふれる感
涙と共に、

大聖人のお膝もとで行学を勵み、本化地
浦の菩薩の道を、ひたむきに邁進する

と普わざにはおれませんでした。

然し、身延山大学に入學して間もなく、
それもホンの束の間にして、驚くべき事を

なるほど身延山は、大自然の山ふところ
につゝまれて、俗塵を離れた静寂そのもの
であることは尊いとしても、不思議なこと
に、当時の身延山は、朝夕を除いては、太
鼓の音さえ聞えないのです。時たま、お題
目の声が、身延の谷々にこだまするかと思
えば、それは团參で來た新興宗教の一團に
すぎませんでした。

伽藍は、どんなに大きくて、また境内
は、どんなに広くても、

これが日蓮宗の總本山なのか

修行という面からみれば、これちあ父の
教会よりも劣るぢあないか

と、あきれてしまいました。

また身延山大学にしても、殆どすべてが
退學的であり、一般大学のような、溢れる

若人の生氣もなく、まして況んや、曾って
青年日蓮大聖人が、鎌倉街頭に立正安國を
獅子吼された氣魄というものは、微塵も感
じ取ることは出来ませんでした。

△何處かと狂っている

私は、心中に叫ばずにはおられませんで
した。それは順逆のいずれにしても、身延
山に対する期待が、あまりにも大きすぎた
といふせいだけではなかったようです。

新聞や週刊誌にも、毎月のように身延に
關するスキヤンダルが、暴露的に報道され
世間をさわがせ、宗門をあわてさせていま
した。

身延全山の、心なき樹木などの大自然を
除いては、何處にも大聖人の息吹きを感じ
ることの出来なくなつた私には、故郷九州
を出て以来これまで、画くいたいでいたウ
ツボツたる自らの道念さえも、こうした環境
の中に、却って阻害され、見失われてしま
うのではないか、という危惧さえ感ぜさせ
られる日が、幾日も幾日も続きました。
△いっそのこと身延を去って、故郷へ帰
てしまおうか

△そして、せめて自分なりにも、父の言い
遣した出家の道を、守り抜いて行つた方が、
よいのではなかろうか

と、何度、思いつめたことでしよう。

心ある人々の中には、身延の現状を憂慮
し、前途を憂慮しない者はありませんでし
た。
△そういうことで、立野上人の御好意を無

にしてしまっては、申訳がない

という反省と、もう一つは、はかならぬ正員兄さんが身延山中で自殺未遂をしたという反省でした。

おそらく正員兄さんも、死に場所を求めて身延山に来た時は、当時の私のような心境であったことでしょう。いな、もっともっと、つきづめた虚無のドン底にあえいだことでしき。

私は、当時の身延山の現状に絶望して、

始めて、正員兄さんが自殺を計らねばならなかつた胸中を、実感として理解することが出来たようでした。

（正員兄さんは敗れた。そして死をもつて僧侶の退廃を抗議した。然し私は敗れてはならない。我が吉松家の悲劇を再び繰り返してはならない）

（もともと私が身延山へ来たのは、行学一達の修証もさることながら、一つには正員兄さんが自殺せねばならなかつたほどの、宗門の因襲と墮落に対して、戦うためではなかつたか。私は勝たねばならない。教われようもない此の虚無の環境を克服し、その中にあって、せめて自分一人でも、本化の僧道を確立し、仏祖の高恩に報ゆることはもとより、父の遺言にもこたえて行かねばならない）

私は夜ごと、祖廟にぬかすきました。そして塔中の、大聖人の尊靈に向つて、ギリギリするような当時の胸中を訴えました。

祖廟にぬかすこと……それのみが、今はの私を救う、唯一の道だつたのです。

ところが、入学して半年すぎた頃、突如、これまでスキンダンルにおよわれ退學に沈
全く突如、身延山の法主貌トが更迭し、内局も一新、年の暮には新内局の陣営も整
いました。

そして翌年昭和三十五年的新春を迎えてより、身延の空氣は、がらりと變って來ました。活氣ずいたのです。その中、最も顯著なものは、創設された身延山街頭布教でした。

これまで、墨染めの衣に麻の袈裟、手甲脚絆に綱代立をまとめてウチワ太鼓をうつ字生の修行が、個々にないではありませんでした。然し縦本山布教部をはじめとして全校学生が、打って一丸となつた街頭布教

は、宗門はおろか、日本仏教界にも曾て行われたこともない未曾有の壯举でした。天地をゆるがす街頭布教擊鼓の法音は、

んでいた身延全山を浄化し、宗門をあるいは立て、一般社会を聴目せしめました。

身延を目の仇にしていた創価学会ですらこの街頭布教には、あだかも身延山秘密兵器の出現とばかりに驚き、にわかにあわて出しました。

たとえば、この年の三月初旬、創価学会青年行動隊が、バスをつらねて身延の三門におしかけ、チンドン屋のような鼓笛と共に、時代劇映画にでも出て来るヤクザのなぐり込みのように、「エイ・エイ・オウ」

と氣勢をあげたのも、身延山街頭布教の威力に対する、悲しくも馬鹿げたアガキのあらわれでしかありませんでした。

それほど街頭布教は、身延全山を一举に

蘇生せしめると共に、社会的に大いなる反響を呼び起したのです。

立正世界平和・創価学会折伏の二大スローガンをかゝげた街頭布教は、寒中、日曜ごとに決行され、身延の玄題廣は、西に東にひるがえり、法鼓は人天歡喜の淨仏國土を、そのまま地上に開拓するが如くでした。

学生の動作はキビキビとし、聲は希望に輝き、交わす言葉も氣鎧にあふれています。それは今まで想像することさえも出来ないほど飛躍した。身延山学生の姿でした。私は、こうした街頭布教を、丸一年間、外部から傍観していました。というのは私自身、一挙に街頭布教隊の中に飛び込めないものがあったからです。

それは入学当初からの、私の態度でもあ

りました。身延山の中には、常に第三者的立場で身延山、並に日蓮宗門を批判しようとして、その批判の中に沈没し、或は自虐的になっていたのです。

然し、街頭布教に参加する学友の、出発前、準備にいそぐ姿、帰校しても、なお布教成果に興奮している姿を見るにつれ、或は街頭布教中の貴重な体験等を聞くとはなしに聞くにつれ、もはや単なる傍観者のままでおられなくなつて来ました。

私も学友と共に、せめてウソ横している胸中のものを、布教という濫過器を通して天地一杯、清淨なものとして吐き出すように叫びたくなる思いが、日に日につづけて行つたのは事実でした。

昭和三十六年の三月、身延山街頭布教が始まって以来、丸一年目、法主猊下の肝入りで、第一回東京街頭布教が決行されることになりました。

大東京進出の街頭布教、それは天下の庄目を集めて、總本山のカナエの輕重を問う布教だけに、準備は万全を期して進められました。

本山も学生も沸き返っていました。身延町よりは、婦人会も大挙応援出動することになりました。私も理論埋屈は後廻しにして、参加せずにはおられなくなつて来ました。ところが、このことが私の人生の第二の転機となつたのです。

東京布教は一泊二日でした。初日は堀之内の妙法寺より日比谷公園・上野公園そして浅草の日蓮宗々務院から浅草六区の繁

華街へと擊鼓行進し、二日目は神田の共立講堂において「仏舍利を讃え世界の平和を祈る集い」が催されました。

この式典は、曾って仏教々団の、いずれの宗にも見ることの出来なかつたほど、嚴粛にして莊厳をきわめたものでした。

仏舍利はインドとセイロンから贈られたものでした。そして二基の黄金の宝櫃に納められた両国の仏舍利は、共に七面山に安置されるようになつていきました。

講場一千有余の席を埋めた共立講堂の式典は、学生布教部長吉崎日出人君の指揮にて、磬鼓の大法音より始まりました。千余のウチワ太鼓の響きは耳を聾し、さしもの大講堂をゆるがすばかりでした。既に感涙にむせぶ者もいました。

ステージの幕が上るや、勇壮な擊鼓唱題

に代る立正学園女子高校生の、滑らかな讀

仏教の齊唱が始まりました。

そして、この齊唱の中、インドの仏舍利はインド大使より、セイロンの仏舍利はセイロン大使より、それぞれ法主猊下に贈られ、七面山別當によつて、日蓮大聖人御真筆大マンダラ大本尊の前に安置されました。並み居る者は、すべてそうだったでしようが、深い感動に打たれ、私自身、頬がほてり、わけもわからぬ感涙が、とめどもなく溢れました。

そして、初めて参加した身延山の街頭布教でしたが、この東京街頭布教隊の一員として、こういう業精しの式典に出席することの出来た法縁を感謝すると共に、久遠の本仏釈尊を心から渴仰讚嘆する日蓮宗、身延山そのものゝ眞底にふれて

△身延山ほど尊い靈山はない△

という認識を、肌身を通して、心魂に刻み込まれずにはおられませんでした。

式典は、仏舍利奉戴後、インド、セイロン両大使のメッセージ、つゞいて身延山法主藤井日静猊下・日本山々主藤井日連猊下身延山岩間布教部長の講演とつゞき、再び吉崎学生布教部長の指揮のもと、感動のルツボと化した鑼鼓唱題の中に幕を閉じ、これより宮城二重橋前へと三千余名の鑼鼓大行進を展開。皇居前にて「國家諒曉の儀」にならう立正安國論を奉唱。以つて大東京街頭布教は国際的な大布教として、大身延の真価を遺憾なく中外に宣揚したのです。それ以来、もはや私は、一宗一派の者ではありませんでした。私の心中には、今

までの本門法華宗だの、日蓮宗だの、とい
う宗派意識は、太陽の光にふれた霧のよう
に消え、東京街頭布教に発揚した身延山の

真価を堅持し、宗派を超えた大身延を本
として、大聖人の真精神を日本国内はいう
までもなく、全世界にまでも顕揚すること
こそ、我が行く道、我が修すべき僧道と確
信されるようになったのです。

父の死が、私の人生に於ける第一の転機
とするならば、昭和三十六年三月の東京街

頭布教こそ、まこと我が人生の第二の転機
となつたのです。

若し、この時、私が東京街頭布教に参加
せず、共立公堂に於ける仏舎利を讀えて世
界の平和を祈る式典をまのあたりに体験し
なかつたならば、おそらく今日の私はなか
つたことでしょう。

そして身延山街頭布教を傍観しつゝ、な
お自己沈潛の虚無の淵より、脱却すること
も出来なかつたことでしよう。

身延山街頭布教は、全国各地に展開する
ことに、有縁無縁の数知れない人々に対し
て、甚大なる法益を与えていますが、私は
布教隊の一員として初めて参加した当初に
して、先ず私みずからが教われたのでした。

このことがあって以来、私は学生布教部
長の吉崎日出人君と、急速に親しくなりま
した。彼の布教に対する熱烈なるファイト
に魅せられ、引きつけられて行つたのです
私は、すんで吉崎君の布教を手伝うよ
うになりました。そして彼と共に学生有志
をつのっては、毎週日曜ごとも身延町内

をはじめ、隣接の村々町々へ禁教宣令し、或る時は、街角に立って立正安國の精神を説き、或る時は、夜の町内の集い・部落の集会にも出でて信仰を語り、その努力の中に、僧道に生きんとする者の喜びを楽しむようになりました。

先哲の教えにも、

「地獄の心を起す時は、法界みな地獄なり。仏の心を起す時は、法界これ仏国なり」と示されていますが、みずから僧道にめざめ、その実践に努力する時、環境もおのずから一変して映して来るものです。今まで氣ずかなかった尊さを、環境の一つ一つの中にも見出されるものです。

身延の全山からは、脈々として鼓動する本地の大生命を感じ、身延の学生の一人一人にも、町の人々にも子供たちにまでも、

親しみを覚え、町全体が本化の法都と化したように感じられてきました。

入学当初、絶えて聞くことも出来なかつた法鼓の書きは、常に耳朶をうつようになり、参拝に来た新興宗教の団体までも、何時しかウチワ太鼓をうつようになっていました。

これも身延山街頭布教の感化によるものでしようが、東京街頭布教を楽園として、私の耳目は開かれ、見るもの聞くものゝ一つ一つに、新生の光明を見出し得るようになって来たのです。

爾来、身延山街頭布教には欠さず参加しました。そして布教現地における寺院檀信徒の、身延山街頭布教に協賛する惜みなき心の底に、

身延山に対する信仰が、如何に根深いも

のであるか

ということを痛感せずに、おられなかつたことでした。

事実、鞆鼓行進する街頭の、左右に居並ぶ人垣の中には、土下座、合掌して感涙にむせぶ人々もあり、その姿に接して愕然としたことも、再二のことではありませんでした。

往来のはけしき街頭にあって、感涙にむせびつつ土下座合掌するということ一

13

れは大変なことです。釈尊以来三千年の僧風は、ここにきわまつた感があります。

然し、若し私達が鞆鼓唱題しなかつたな

らば、まだ、若し行脚姿の僧服をまとつて、
「日蓮は、いすれの宗の元祖にも非ず、ま
た末葉にも当らず」

と主張されていますように、釈尊に直結した超宗派的立場に立つていました。

土下座までして合掌する者がありましょう。従つて弘安五年十月、武州池上の館で御大聖人以来の古色蒼然たる質素な行脚姿入滅されんとするに当つて、

そして打ちならす天鼓、唱える本仏のお題目なればこそ、その僧風を通して、人々の魂はやすぶられるのです。

「たとえ、いざくにて死に候とも、九ヶ年

です。

の間、心やすく法華法を読翻し奉り候山なれば、身をば身延山に立てさせ給え。未来際まで心は身延山に住むべく候」

と御遺言された身延山、更に、

「日蓮が弟子桜那等は、此の山を本として参るべし。これ則ち靈山の契りなり」

と仰せられた身延山こそは、一宗一派の本山のみならず、宗派教団の壁を打ち破つて、全人類の等しく帰趣すべき靈山である

ということ出来ましよ。

身延山が久遠寺と命名されたのも、久遠実成の本仏釈尊を本尊とする本化の法域として、この本尊を中心に、三世十方の諸仏も、その眷属も悉く開顯統一し、宇宙の大調和世界、即ち淨仏國土を、この土に建立しようとする精神に、もとづいていたの

もともと大聖人の身延山に対する考へはこうした超宗派的なものであったのでした。ところが多くの人々は、そして曾って私自身も、狹小な宗派根性から、身延山を日蓮宗一派の總本山という見方しかしてなかつたのです。

然るに、今や身延山は、大聖人滅後七百年の歴史を辿りて、未曾有の街頭布教を全国的に展開し、宗派を越えて、大聖人本来の眞面目（しんめんもく）を、全世界に向って宣揚しようとしています。日蓮門下の者として、誰か、この壯舉に感動し、感奮しない者がありましよ。

ところが、こゝに到つて私が、今まで所屬していた本門法華宗をふりかえつてみると、ならば、本門法華宗にあつては、なお派祖

の日隆上人を、強く表面に打ち出している。子の私自身が、再び日蓮宗へ戻ることが出来たのです。風雪三十有余年、思えば感慨却って日蓮大聖人が、日隆上人の影にかくされてしまい、狭小な宗派意識の内に委縮したまゝ、我有大乘に落ち込んだ現状から、

脱皮出来ずにいるのです。

私が身延山衝頭布教を通じて、本門法華宗より日蓮宗へ改宗するようになつたのも蓋し必然のなり行きでありましょう。

父が日蓮宗より本門法華宗へ転宗して以来、三十有余年の歳月を経ることにより、曾って正員兄さんが自殺しようとした因縁の地身延山から、今や勃然として展開して来た街頭布教の僧風を通して、奇しくも末

さて昭和三十七年三月、無事身延山大学を卒業した私は、その足で日蓮宗布教研修所へ入所しました。

14

当時、研修所は立教廈宗の聖地である千葉県の清澄山にあり、支所が東京郊外の松戸の本土寺にありました。ここでの研修一年を経て卒業した時、研修所は身延山へ移転することとなり、私は研修所の書記を拝命することになりました。

私は一旦、故郷九州へ帰り、母や兄たちに永のお暇乞いをしました。というのは、ひとつたび日蓮宗に帰った以上、一家の中、

私一人でも身延山を本として、法華經を宣布する

といふ決意を固めたからでした。

私は、私が繼ぐべきはすであつた本門法華宗の父の道場も、その遺品も、悉く兄たちに譲り、再び単身、無一物で身延山へのほって来ました。

単身、無一物、学生時代ながらの一組の夜具と若干の書物、これが故郷を去るに際して、分与された私の財産のすべてでした。

した当時のような、疑惑も危惧も反抗もなく、たゞひたすらに三宝に順順して僧道を誇り抜かんとするばかりでした。研修所に勤務してより一年有半、身延の生活も大学入学以来六年目を迎えていましたが、この間、私が最も喜びとするのは、毅法精神に燃え沸る実践的同志学生僧が、毎年のように、陸続として身延山から輩出されている、という事実です。

学生僧は、大身延の建設と世界宣布をめざして、年々自主的に、その結集を拡充しています。

「久遠の本仏祇尊が、法華經を説かれたインドの靈巖山と、本化上行菩薩の再誕日蓮即出家、私は無一物の底から本化僧道の第一歩を澄み出したのでした。

両山一体を基盤として世界恒久平和を建設
しよう】

というスローガンをかけた鷺峰会学生
僧の集いこそ、実は身延山街頭布教がおの
ずから生み落した大いなる遺産の一つであ
りますが、私自身、この集いの中にある時

もはや単身無一物ではなく、僧道かぎり無
き本化の僧伽の、無数の同志と共にいるの
です。

【僧道のある所、善友あり】

今、靈山身延にあって、限りなき法友に
かこまれている幸いは、かけがえもないも
のです。

それにつけても、今日の私をあらしめた

父、父を出家せしめた母、身延山を紹介し
て下さった立野上人、そして在学中、孤独
なる私の友となつて導いてくれた吉崎君……

吉崎君は大学卒業後、故郷北海道へ帰つて
布教に専念しているため会う機会もありま
せんが、そうした人々のおかけを、感謝せ
ずにはおられません。

15

私は、父が遺した本門法華宗の道場をす
て、単身無一物となつて日蓮宗に改宗しま
したが、然しこのことについて、少しの未
練もなければ、微塵も後悔しております。

負け惜みでなく、むしろ新たなる人生の
門出にあたつて、既に教知れない同志青年

僧と交わることを無上の喜びとしていま
す。

これからさき、長い前途には、幾多の困
難もあり、障害もよこたわっていることで
しょう。然し同志あい助け、励ましあつて

仏祖の悲願のまにまに、身延山をして世界の大身延に、日蓮宗をして世界の大僧伽にすべく、我が拙なき生涯を捧げぬく覚悟でいます。

私は、この覚悟を新たにするたびごとに天に向って祈ります。

「お父さん、正員兄さん、どうか安らかにおねむり下さい。私は、お父さんや正員兄さんが、果そうとして果すことの出来なかつた分までも、果して行きます。

どうか安らかに、……そして私を見渡していて下さい」

(おわり)

出家となることは、我が身助かるのみならず、親をも助け、上無量の父母まで助かる功德あり。されば人身を受くること難く、人身を受けても出家となることもとも難し。

然るに愚癡におうて還俗の念起ること、淺ましき次第なり。金を捨てゝ石を取り、薬を捨てゝ毒を取るが如し。我が身惡道に墮つるのみならず、六親眷屬をも惡道に引かん。

絶に云く「出家の還俗は、そのとが五逆にすぎたり」と。

(日蓮聖人 出家功德御書)

出家の功德

ケサとスサ



身延山大学一年

近藤達也



コロモとケサ、日本の僧侶が白衣の上にまとうものは、このコロモとケサですが、コロモにしてもケサにしても、通常、特殊な織物で出来ており、特にケサの如きは、目も奪うようなゴウカケンランたるものも少くありません。そしてコロモやケサによって僧侶の階級がつけられているほどです。然し南方仏教の僧侶には、コロモとケサの区別はなく、またそういうものによって階級を定めるというようなこともなく、みな一律に木綿の布を黄色や柿色に染めて、まとっているにすぎません。

通常、黄色なのはセイロン僧、柿色のはビルマ僧をはじめ、東南アジアの佛教徒です。

僧侶が、こういう色ものをまとうに對し
て、一般在家の人々は、單なる白衣をまと
っており、お經文の中に「白衣の家」とあ
るのは、在家という意味のことです。

☆

では何故、僧侶に限って、色ものの衣を
まとうようになつたのか、と申しますと、
これには次のようなわけがあります。

仏教の開祖はお釈迦さまですが、お釈迦

さまは常に質素を旨としておられました。

それは、教わねばならない一般大衆の中で
も最下底の人々と、苦しみも悩みも分けあ
る慈悲心に住しておられたからでした。
当時インドの最下底の人々といえど、た
とえば着る着物にしても、満足なものでは
ありませんでした。

お釈迦さまは、それらの人々と同様に、
乗てられた布切れを、拾い集めては縫いあ
わせました。縫い合せた布が、みな色とり
どりでしたので、一色に染められたのです。
仏弟子たちも、皆これをみならいました。
そして仏教の僧団の中には、一切の階級は
剃髪され、お釈迦さまといえども、決して
特殊な階級にあつたわけではなく、まとう
コロモも皆同一のものであつたのでした。

☆

今日、ケサに五条、七条、九条、或は十
何条、二十何条、三十何条という種類があ
るは、実はお釈迦さまが、拾い集めて縫
い合わされた、布切れの枚数に起因するも
のです。

ところが日本佛教界にあっては、こうし

たお釈迦さまの慈悲心に反して、コロモも

ケサも特殊な織物となり、わけてもケサは
条数の多くなるに従って、目もくらむよう
なゴウカケンランたるものと化し、これに
よって僧侶の階級を厳然として区別するよ
うになっています。

それはココモやケサによつて信者を感服
させたり、或は満足させようとするのであ
るかもしませんが、それにしてもお釈迦
さまの精神からすれば、全く皮肉な現象で
もあり、笑止千万のことにつきません。

この場合は、お釈迦さやは、布施供養する
人の心が正しければ、また施す布が華美な
ものでない限り、應供（仏陀十号の一つ）
されていました。

お釈迦さまの晩年、提婆達多が仏教々團
に反逆を起そうとした時、ことさらにボロ
ボロの衣をまとめて大衆をあおりました。
「ワシの衣を見よ。ワシは釈迦よりも粗末
な衣を着ている。それは釈迦よりも勝れた
修業をしているからだ」

愚かな大衆は、提婆達多にそゝのかされ

☆

といつてお釈迦さまが、その生涯八十年
の間、何時もボロボロの布切れを拾い集め
られては、これを縫つて着させていたのか
どうと、決して、そうとは限つていませ

んでした。

て、お釈迦さまにそむいてしまいました。然し間もなく、だまされていたことに気がついて、再びお釈迦さまのもとへ帰ったと
いうことですが、この物語によつても、お
釈迦さまは華美にならない範囲では、信者の施す布を受け取られていたということが
推察されましよう。

☆

ある日のことです。

「私の擰げる布をケサとして、お秘め下さ
いますならば、私の生涯の中、これにすぎ
たる光榮はありません。どうか、このこと
によって、私に功德をつませて下さいま
せ」

と、沢山な布を供養しようとした人がい
ました。お釈迦さまは、その人の真心をく

ついて、再びお釈迦さまのもとへ帰ったと
いうことですが、この物語によつても、お
釈迦さまは華美にならない範囲では、信者の施す布を受け取られていたということが
推察されましよう。

み、その中の一枚を自分のものとして受け
取られ、他は悉く仏弟子たちに漏れなく分
配されました。

そして、そばにかしづいていた常随の弟
子、阿難尊者に向つて、次のように申され
ました。

「阿難よ、今、須いたケサが着るに堪えな
くなるほど古びたら、そのケサは、どうす
ればよいだらうか」

阿難尊者は答えました。

「世尊よ、その時は、ゾウキンにして使用
したが良いと存じます」

お釈迦さまは、更に尋ねられました。

「そのゾウキンも、ゾウキンとして堪えら
れなくなるほどボロボロになつたとしたら
どうすればよいだらうか」

「壁土をねる時のスサにしたが良いと存じ

ます」

「阿難尊者の答えにお釈迦さまは、満足をうにうなずかされました。そして、

「ありとしあらゆるものは、すべて、その

ように大切にしなければならない。ものには命がある。ものを粗末にすることは、ものの命を奪うに等しい。

自分自身の命も、実は、そうしたものゝ命によって保たれている。されば、ものを粗末にすることは、とりもなおさず自分自身の命を粗末にしていることになる。自分の命を大切にするように、ものの命を大切にしなければならない」と教えられました。

「殺すことなかれ」という此の戒律は実は「生きとし生けるすべてのものゝ生命を尊重せよ」

という精神より発したものであって、お釈迦さま御在世当時が、あだかも殺伐たる戦国時代であったため、敢て、この精神を強く打ち出すため、反語として「殺すことなかれ」と表現されたのでした。

ものを大切にすることは、決して吝嗇でなく、ものの命を大切にすることでありたとえ一枚の紙にも、一滴の水にも感謝することです。

ものを粗末にする人は、やがては人の命さえ輕蔑するようになります。

生きとし生ける、ありとしあらゆるものに感謝出来る私たちでありたいものです。

仏教の五戒の第一は「不殺生戒」ですが

(おわり)

教 講 説 明

顔 と 人 格

あなたは
あなたの お顔に
御満足ですか

小 林 白 峰



鏡に向つて人格をたすねよ
1 頭は人格をあらわす

人間の五体の中、何時も外にあらわれて
いる部分は顔です。手や足もあらわれては
いますが、然し、手には手袋、足には足袋
(タビ) 靴下をして包んでいることもあります。
夜、寝る時、夜具の外に出でている部分は、
矢張り顔だけです。

顔こそ四六時中、何にも包まれず、外に
あらわれているものであり、外部と直接
交渉をもつものです。

それだけに、その人の内部のものも、包
みかくすことなく、顔を通してあらわれま
す。

「目は心の窓」

というコトワザもありますが、実は顔全体が、その人の人格を端的に表示しているのです。

写真にうつるにしても、着ているものとか、スタイルということよりも、中心は矢張り顔であり、仏師が仏像を刻む時、最も苦心するのは、仏さまのお顔といわれているほどです。

しおうが、最近の女性のお化粧は、とくにどきつくなり、厚化粧の上、色々なカラーリングで色彩していますが、彼女たちは、鏡の向った時、どんな心境でいるのでしょうか。

また男性にしても、毎日ヒゲをそり、髪型を入念に手入れしている人も少くないでしょうが、みだしなみは、みだしなみとして、男性にしても女性にしても、鏡に向った時、外観の美のみならず、心の美、更には全身にたゞよっている、しかも偽ることの出来ない自分自身の人格というものを、鏡にうつるおのれの素顔の上に、反省する人が幾人いることでしょう。

ところが一般の人々は、顔といえば、外観の美しさというこのみに心をつかって、人格をあらわしているということには、一向に関心も持たない傾向が強いよううにみうけられるのは、一体どうしたことでしょう。

外観の美醜は、直接、人格に関係はありません。たとえ、どんなにみにくくい顔であ

週刊誌や婦人雑誌の影響も大いにあります。

2

3

つても、立派な人格は、そのまゝその相にあらわれるものです。

形の上でいえば、最もみにくい顔は、お化粧してもおつかないシワだらけの老人の顔でしょう。

然し、人格という点からすれば、深く刻まれた無数のシワ、その年輪の中に、おかしがたいさを感じさせる人が少くはありません。

顔……それは人間の全身の内容を聚微するものです。もはや顔の筋屈氣、言葉に出る筋屈氣、或は書いた文字に漂う筋屈氣等は、すべてその人の人格をあらわしているといえましょう。

人間、何時までも若くなく、また健康であるとは限りません。如何に若さと健康の美を誇ってはいても、やがては失うものです。

顔にあらわれるまことの美、それは内的な人格によるものです。通りすがりの人の中でも、「オツ」と息をのむような感を与える人がいます。そういう人は殆ど、その

道の修行を積みに積み重ねた老人です。そしてその人の人格は、顔のみならず、全身の筋屈氣として包み込むような風格をたゞえています。

毎日、鏡を使う人も使わない人も、日に一度は鏡に顔をうつして、おのが全身にたどりよう人格的筋屈氣をかえりみ、最高の筋屈氣とは一体どういうものなのか、と探究するのも一つの修行方法であり、心的な美術でもあります。

信 仰 伸 相 談 室

謗 法 と は
ど う い う こ と か

象 白 日 高 説 解

おたずね

お題目を唱える日蓮門下系統のものは、
しきりに「謗法」ということを主張します。
何か不祥な禍いことでもあると、

「謗法だ。懺悔しなければならない」

といい、何でもかんでも「謗法」という
一言で、きめつけてしまおう傾向が強いよう
です。懺悔文の中でも、

「謗法誣悔、罪障消滅」

という言葉すらあるくらいです。

もとよりこのことは、宗派教団の教えや
或は人によって、理解の仕方も異っている
ことでしょうし、必ずしも内容は同一であ
るとは限らないかも知れません。

然し、日蓮聖人の御遺文の随所にも、謗
法という言葉が盛んに使われています。

日蓮聖人の申された誘法の内容と、今日宗派教団の中で言われている誘法の内容とでは、そこに多少の（或は天地の）相違があるにしても、誘法という言葉には、何かしら反発を感じざるを得ないまゝにも、大いに心ひかれるものがあり、関心を深めざるを得ないものを覚えます。

一体、日蓮聖人は、どういう意味で誘法という言葉を使われたのでしょうか。日蓮聖人が使用された誘法というのは、一体どういう意味のものなのでしょうか。その根本的内容をおなずねいたします。

おこたえ

申すまでもなく、誘法の誘とは、誘導の誘で、「そしる」ということ、誘法の法とは

正法一 法華經のことですから、誘法とはいうなれば法華經を説説する（そしる）ということにほかなりません。

ところが、ここで注意しなければならないことは、法華經とは「天地の真理」といったような、單なる抽象的なものではなくして、あくまで具体的な法華經中常住の三宝のことである、ということです。

もとより三宝とは、仏・法・僧の三宝のことになりますので、法華經における三宝の中の仏とは、久遠実成の釈迦牟尼仏のこと、法とは、その因行果徳の教法である法華經々典の内容（詮ずればお題目）のことであり、僧とは、僧伽（サンガ）、教団）の略称、ここでは久遠の本仏釈尊を中心として、その教法を如説に実践している菩薩ならびにその菩薩團（上首上行菩薩の再誕

である日蓮聖人のことです。

従って誇法とは、具体的にいえば、かる三宝をそしるということ。則ち久遠の本仏教尊をそしり、その教法たる菩薩道をそ

しり、日蓮聖人をはじめとするその実践者ならびに実践団体（菩薩僧伽）をそしる、ということです。

ところで「そしる」という口業は、こゝでは身口意の三業を総括的に代表しながら、「そむく」という積極的な意味も持っています。

また「そむく」という意味の中には「徳わぬ」ということも含まれていますので、「帰依しない」という消極的な意味も持っています。

日蓮聖人が申された誇法というのは、こういう広範囲な内容をもつものでした。則

ち、法華經の三宝に対して、「そしる」ということはもとよりのこと、「そむく」ということも、「帰依しない」ということも、悉く誇法であったのです。

要するに日蓮聖人にあっては、久遠の本仏教尊を本として、法華經の菩薩道を実践するという、その信仰実践に欠けることも、またこれに反することも、悉く誇法であります。過去・現在・未来および三世にわたって反省するところのものであったのです。

何と厳しい誇法觀であります。しかかもみずから、この誇法實悔に徹して行かれたのが、日蓮聖人六十一年の生涯であったのです。

「大難凶ケ度、小難かずしれす」

というのは、日蓮聖人の忍難の絵巻であります。そうした法難を受けられるたびに大聖人は、「今生、法華經の普隨道を実践する上において、こうした迫害にあうのは、過去および過去世において私自身、誘法を犯していた罪の報いである」

「この法難を堪え忍ぶことによって、過去の重罪が消滅するのであるから、法難こそ喜ぶべきであり、迫害する人々にこそ感謝すべきである」と仰せられていますが、事実、大聖人は

建長五年四月二十八日、三十二才にして立教開宗を宣言されるまでの間にあっては、たとえ道修のためとはいえ、念佛に学び、禪を習うにあたっては、単に机上の修

字のみでなく、その奥義を体得すべく、行学ともに身をもって努力し、努力する間にあっては、指導者に従って法華經を説誘することも了とし、またみずからも説誘したことがあったのでした。文永九年三月二十日づけの佐渡御書の中に、

今生に念佛者にて数年が間

法華經の行者を見ては

未有一人得者、于中無一

等と笑いしなり

と述懐されているのが、則ちそれです。

今、誘法の醉、醒めてみれば

大聖人は更に、このことを警えをもって、

酒に酔える者の

父母を打ちて悦びしが

酔さめて後、嘆きしが如し

嘆けども甲斐なし

この罪、消え難し

如何に況へや、過去の誹法の

心中に染みけんおや

経文を見候えば

鳥の黒きも、鷺の白きも

先業の強く染みけるなるべし

と反省され、

「たとえ知らずして犯してしまった誹法で

あつたとしても、知っていて敢えて犯した

誹法の罪と、結果においては同じことであ

る

とし、また、

「誹法と、知る知らずにかゝわらず、そうした罪を犯すようになるのも、実は過去および過去世において、犯していた誹法の業があつたからである。」

という見地に立って、大聖人みずから、

過去遠々劫來の誹法の罪業をかえりみられては、同じ佐渡御書の中に、

過去の誹法を案するに

誰か知る

勝意比丘が魂にもや

大天が神（たましい）にもや

不輕（菩薩）輕毀の流類か

（寿量品）失心（狂子）の余残なるか

（方便品）五千上優の眷属なるか

大通第三の余流にもやあるらん

宿業はかり難し

と仰せられているように、法華経をはじめ一切經典の中にあらわれている誹法者の罪の姿までも、悉く我が身にあつて、過去世における、みずからの誹法を懲悔されたのでした。

何と峻烈な懲悔でしょう。すさまじいば

かり厳しき懺悔ではありますか。然し、

はありません。

こうした懺悔に徹しておられたればこそ、
襲い来る幾多の法難の中にあって、

現在の大難を思い続けるにも涙

未来の成仏を思うて

喜ぶにも涙せきあえず

鳥と蟲とは鳴けども涙落ちす

日蓮は泣かねども涙ひまなし

この涙、世間のことにはあらず

たゞひとえに法華經の故なり

若し然らば甘露の涙ともいふべし

と、限りなき法悦にむせんでおられたの
でした。

3

たとえば、法華經を信仰しない人、或は
法華經にそむき、法華經を説誘している人
に対して、

「それは説法だ」

と、きめつけではみても、

「あゝそうかい」

と軽く、あしらわれるか、却って反抗さ
れるのが通常です。というのは説法懺悔と
いうものは、法華經に対する至心の讃嘆と

渴仰、そして感謝の心を母体としての、
始めて可能とされるものであるからです。

讃嘆と渴仰と感謝ー その心が深くなれ
ばなるほど、説法懺悔の心もまた、これに

比例して深まって行くものです。
従って、説法の人には説法を知らしめて、
比例して深まって行くものです。

但し、説法懺悔というものは、しようと
思っても、たゞそれだけでは出来るもので、

これを懺悔せしめんとするならば、ます何

よりも第一に、法華經の尊さそのものを知らしめねばなりません。

うす暗い所では、よこれたものでも、さ

ほど気にもかけず、苦にもなりません。然

し白日のもとでは、ちょっとしたシミでも

気がかりになり苦にもされます。

それと同様に、法華經の光明に照されれば、これまで氣もつかず苦にもされなかつたほどの、小さな罪のアカまでも明白となり、光が強く感ぜらるれば感ぜられるほど、爪さきほどの罪のアカにも、底知れぬ懲業を感じて、懺悔せすにはおれなくなつて来るものです。

日蓮聖人は、現在の苦難そのものに、過去説法の非のすべてを感じられたのですがここに大聖人の、あの酸烈きわみなき懺悔の底に、本仏釈尊を恋慕・渴仰・讚嘆・感

謝される心が、如何に切実なものであったか、ということを、今一度ふりかえってみるべきでしよう。

4

法華經における菩薩道の実践、これなく

して三界六道の苦縛より解脱（げだつ）することは出来ません。それだけに、この菩薩道の尊さを知る時、これまで此の菩薩道を知らず、また実践せずして、六道に輪廻していた罪の、如何に深重であるか、ということを痛感し、ここに始めて、その罪のすべてを、誹法として懺悔されるのです。

一切の苦は、誹法より起ります。法華經における絶対の光明を知らずして、相対の苦に著し、苦をのがれるに苦をもつとしているのが、六道中の人間界の実体です。

家族においても、社会においても、そしてどうでしょうか。

て國全体、世界全体においても、すべてが
謗法の苦にのたうっています。絶対なる恒久平和を求めるながらも、求むれば求むほど、苦惱を増長していること自体、法華經の菩薩道の実践をないがしろにしている所以にはなりません。

この時、日蓮門下の者が奮起して、この

菩薩道を身をもって人類に示さねばならないのですが、今日、新興宗教を含める日蓮門下お顕日系の各宗各派各教団、その総努力は日本佛教界隨一であります。これが、どれほど読嘆・感謝しているでしょうか。

また自分自身の謗法の罪を、どれだけの人が、どれほど本仏教等を恭慕・渴仰し

るでしょう。

乃至は親・兄弟・妻子等々の家族の一人

一人の謗法、或は隣人・友人の謗法、ひいては國家社会の謗法、世界全体・全人類の謗法を一身に感じて、身命も惜まず、ひたすら本化の菩薩道に精進努力している人が果して幾人いるでしょうか。

「謗法とは何か」

それは最早、教理上の問題ではなく、私たち日常生活に即する、生々しき現実の問題となっているのです。

読者之声

その一

長野県 丸山勇夫

前略、本日「鷲峰」八月号を受取り、急に雑誌が薄くなってしまったので、資金難で縮少されたのかと、まず皆様の御苦労を思ひながら、御声援することしか出来ない不甲斐なさに、申し訳なく感しましたが編集後記を読んで、雑誌の薄くなつたのも発行の遅れたのも、皆様の各地における行学布教の多忙によるところを知り、むしろ私は大へん喜しく存じました。

何となれば、「鷲峰」を読まれる方々は毎月その発行を待っておられることが多いが、読者は既にお題目を唱え、相当真剣に御修行もされておられることう思います。然るに、世の一般の人々の中には、未だ法華経を知らずにいる人々、或は法華経を説説する人々か、何と多いことでしょう。

衝頭布教は、そうした不信・説法の人々に対して、大法下種のため、毒蟲の縁を結んで行く菩薩行であり、現下社会の禮貌であると思ひます。

かく思う時、このことのためならば、たとえ鷲峰誌の頁数が少くならうとも、また発行が遅れようとも、一向に、かまわないと想ひます。

大切なことは、万人の為し難き衝頭華嚴宣命です。どうか、これだけは今後とも、

強力に推し進めて下さい。

そして禰天下に、日蓮大聖人の残された立正安國の大精神を獅子吼さんことを切にお願い致すものです。（後略）

その二

北九州市 大雄寺 刀 楠 義 昭

去る七月二十二日、身延山を出発して八月十二日のお盆直前まで、炎天下およそ三週間、北陸三県をはじめ大坂、高槻、堺、阪南五市、更に真言宗總本山の高野の峰から和歌山まで街頭布教をされ、休むいとまもなく九州まで西下して、福岡県日蓮宗青年会の主催する一泊二日の教学研修会、ならびに久留米における講演会、等々の布教に当られた身延山学生布教師、そしてこれ

を指導された日高上人の御労苦には、甚深の敬意と謝意を捧げるものです。
その後、鷺峰誌の発行が遅れ、遅れだけに夏三週間の布教が、如何に大へんなものであつた、と想像されます。

思うに街頭布教を実施されるたびごとにその成果は、ますます顯著なものとなつて来ているようですが、このたびの北陸、関西方面の布教成果も、また一層甚大なものであつたことでしよう。

おかげさまで、九州各地における研修会講演会も、予想以上の大成果をみることが出来ましたか、本誌上に街頭布教の紀行を報道されるに当っては、九州における講演内容、特に満場の耳目を驚倒せしめた日蓮

「久遠の本仏と人間界等の関係」

「大マンダラと本仏界等の関係」

「本尊と題目の關係」

等々の論旨は、是非この際、本誌上に公

開して頂きたいと思います。

これは、おそらく大反響を巻き起すこと

だと思いますが、反響の如何にかわらず、

日高上人の把柄されている日蓮大聖人の本
尊既は、今こそ発表公開する好機であり、
これを契機として、

「秋祭に帰れ」

という大連続の展開を窺かねばならない
と切念するものです。

なお、うけたまわるところによれば、街
頭布教に参加された学生諸師の疲労は甚し
く、全員やせこけ、中には三貢目以上もや
せた学生もいた由、また日高上人には眼精

過労のため当分執筆も不可能であった由、
このため爲め終發行が頗る阻害されたようで
すが、今や驚峰誌は宗門文書伝道の中でも
最もその価値高きものゝ一つとして、万人
の注目と期待を集めに至っているもので
すから、今後においては如何なる事情にも
はまることなく、所定通り発行される
よう万全の体調を整えて頂き度いと存しま
す。

いさゝか苦言を呈して恐縮ですが、これ
は驚峰誌の価値を惜むが故であり、読者の
期待と、本誌紹介世話人の身を思うが故で
あります。

どうか本誌が、日本佛教界に輝く伝道誌
として万人を法益する日の、一日も速かで
ありますようにと切にお祈りいたします。

鷲峰賛助会員と

身延山金銅釈尊像の写真

本誌発展のため温く御指導、御支援下さ
います。読者皆様に厚くお礼申上げます。特
に年間六十人の人々に対し、本誌見本とし
て宣伝寄進する資金として、年間三千円を
御志納下さいました鷲峰賛助会員の方々に
は、こゝに御芳名を御紹介申上げ、謹んで
衷心より感謝の意を表させて頂きます。

鷲峰賛助会員

福岡県 井上ヨシノ 鎌倉市 藤原玄通
古賀みゆき 岐阜県 小島休一
和歌山 土橋通玄 兵庫県 岡 秀藏
東京都 三木君江 大阪市 高木龍修
有賀義雄 名古屋 西村みさ

なお、これまでに御加入下さいました贊
助会員の方々には、贊助記念として本誌表
紙の写真を、四つ切り大に引き延して一枚
ずつ御寄贈申上げております。御加入され
ながら、未だ受取っておられない方はお
申出下さいませ。

この釈尊像は、身延山奥之院参道二十五
丁目の三光堂の釋迦佛を原型として、寸分

も違わないものを京都の平安美術で铸造。
お釈迦さまが法華經を説かれたインドの靈
鷲山に、近く建立される仏舍利塔の正面本
尊として、身延山から渡印すべく、目下身
延山祖師堂の横の本師堂内陣に安置されて
いる国際的な大仏像です。 鷲峰賛助会員

(敬称略)

本誌発行所の変更について

編集部

本誌「鷲峰」の創刊号が発行されたのは昭和三十七年十一月十五日でした。当時は表紙の紙も、内側の紙も全部ワラバン紙。印刷も学生みずから原紙を切り、みずから墨写していたものでした。

もちろん誌代も無料。学生の休暇を返上した各地の行脚布教による善財を発行資金として知人、友人そして学生の実家寺院檀信徒を中心に、有縁の人々に差し上げていきました。

そして昭和三十八年の暮れまでには第六号を発刊、通算すれば隔月ごとに本誌を発行したわけですが、この間、関西方面の行脚布教を縁として大阪の東洋印刷社、長藤原秀憲氏が、第一巻第五号より現在の如き表紙を印刷寄進され、内側の紙も中質のものを大量に寄進されることにより、本誌は外装とともに急速に充実して来、更に、かねて各地の読者より、「無料で頂くわけにはいかないから、是非

誌代を決めて欲しい」

という要望が高くなつて來ていたこと、また一方、各地の篤信者の中より、毎月のように、或は折につけ、自発的に贊助金を寄進されていたため、昭和三十九年の新年号より、

「誌代は一冊五十円、半年三百円、一年六百円」

「贊助会費は一年三千円」

と定めることとなり、ここにはじめて本誌も毎月一回発行する雑誌の体裁を整え、本年第二巻の三月号よりは、ガリバン印刷もタイプ印刷として発展。読者も贊助会員も、号を追うことにより激増し、本誌は怒濤の勢いをもって飛躍して行きました。

もとより身延山の葛峰会学生は、宗門布教の中でも最も緊急にして至難とされてい

る立正青年運動に対し、未熟ながらにも

みずから身命をも惜まぬ行学二道の精進をもって体当りして行き、この功德をもつて身延山を本とする大日蓮宗の創造に寄与す

ると共に、引いては久遠の本仏釈尊が法華經を説かれたインドの靈巖山と、本化上行

菩薩の再誕たる日蓮大聖人の魂魄を留められた身延山とを、お題目によつて結び、こ

の法脈を中心として、立正世界恒久平和建設の曙光を輝かしめんと、ひたすら世界宣布の祈りつゝり、その祈りを不誌紙上にぬりつけて参りました。

然るところ、ここに思わざることが起りました。それは、本誌が身延中心の全国青年運動を目標とするものであるといえ、

もともと身延山よりは数十年来「みのぶ」教報という本山直営の機關雑誌が発行され

ているため、

「一山より二本立ての月刊誌が発行されて
いる」

という、うらみを生ずるに至ったのであ
ります。

もとより本誌は、身延中心の青年運動誌
を目指としていますので、「みのぶ」教報

とは開拓の層も連っており、従つて読者の
中には両方とも愛読されておられる方々も
多いのですが、一本化の方が強力的である
ことは甲子までありません。

そこで本誌は、もともと学生の自発的意
志より興つて来たものでありますので、
ここに発行所を身延山外へ変更せざるを得
ないこととなりました。

幸い、本誌印刷所の所在地、甲府市内に
は、本誌の愛読者であると共に、檀信徒の

中にも賛助会員を擁しておられる妙本寺住
職勘定義宗上人がおられ、妙本寺は本誌の
日高編集長が、曾つて「みのぶ」教報編集
時代、その校正のため甲府出張中の事務所
としていた所でありますので、この因縁
により、本誌の発行所を九月号より、

甲府市朝日三丁目一番地

妙本寺内

鷲峰発行事務所

(電話・甲府二局五五八五番)

とすることとなりました。

然し発行所は変りましても、鷲峰会の方
針も、本誌の方針も、その他一切、何ら変
ることはありません。また振替口座も從来

通り、

「甲府 二〇九三番」

であることに変りはありませんので、今

後とも、この口座を御利用下さい。

なお「信仰相談」「読者の声」等々の通信は、直接日高編集長のもとへお送り下さい。住所は、

山梨県身延町波木井

醒悟園 本妙庵

ここは身延の本山と身延駅の中間に位する波木井の山頂です。

今後とも鷲峰会と鷲峰誌に御期待下され
より一層の御指導・御声援・御支援をたま
わりますよう、学生一同伏してお願ひ申上
げる次第であります。

鷲峰発行体制

鷲峰発行が八月号以来おくれ、全国の読者皆様より数多くの問い合わせがありましたが、鷲峰会学生一同、今後、如何なる事態があつても、定期発行には寸時も遅れないよう、体制を充実しました。

本年中は、遅れをばんかいすることに専念、毎月二回発行いたし、新年号よりは毎月早めに先送いたします。

こゝに読者皆様の御期待にそつ決意を新たにすると共に、なお手落ちの点、お気付きの点などをりますれば、どしどしあ申出下さいますよう、お願ひ申上げます。

鷲峰会

鷲峰発送部

編集後記

鷲峰 九月号
昭和三十九年 第二卷 第九号
通巻 第十五号

☆日高編集長の健康が回復したことにより遅れている本誌も急ピッチに発行し、十二月末には新年号を出してしまったという意気込みとなりました。御心配下さいました読者皆さまには、謹んで御安心を願い、一層の御期待を乞う次第であります。

☆十月号には北陸三県・関西方面の街頭布教ならびに九州講演布教に関する紀行概要を掲載し、特に九州講演の論旨である日蓮大聖人の本尊觀を巻頭に掲げることを致しました。

☆日蓮大聖人の本尊觀といえば、そう聞いた心地でも取りつきにくい難解さが感ぜられるかも知れませんが、日高上人が出来るだけ平易に、たとえ語をもって執筆されるそうですから、御期待下さいますよう。

定価五十円

昭和三十九年八月二十日 印刷

昭和三十九年九月一日 発行
編集兼发行人 日高白象

印刷所 甲府市中央二丁目五ノ二三

発行所 甲府市朝日三丁目二番地

天野謄写堂

妙本寺内

鷲峰会

電話(甲府) 二局五五八五番

振替(甲府) 一二〇九三番

誌料 半年分 三〇〇円(二千共)

一年分 六〇〇円()

鷲峰贊助会費 一年分 三〇〇〇円(分納可)